



バルジの戦い50周年



連合軍、雪中の反撃

白石 光

☆無視された危険性

1944年12月、ベルギー北東部のアルデンス地区は寒気と静寂に包まれていた。うっそうとした針葉樹林の樹海の中に町村が点在し道路や河川が走るこの地区は、1944年6月のノルマンディー上陸以来戦闘が行なわれていないことと、秋から冬にかけて森の中で頻発する霧のせい、連合軍将兵から“幽霊戦線”というニックネームを付けられたほど静かな場所だった。

交通路の幅が狭く、ルートの数も限られた巨大な森林地帯は、天然の障害として攻勢作戦には不向きな地形であった。そのため、モントゴメリー麾下の第21軍集団によるオランダを経由してドイツへと侵入する計画、そして、今のルクセンブルクからドイツのザール地方への侵入を企てるパットン麾下のアメリカ第3軍の計画が、どちらも連合国ヨーロッパ派遣軍総司令官であるアイゼンハワー元帥の承認を得ていた一方で、総司令部にしても、両兵力の“矢尻”に挟まれたアルデンス地区は「静かで安全な戦線」だと考えていた。

この時期、同地域を預っていたのはアメリカ第8軍団だった。同軍団は、これまでの戦闘で疲弊した2コ師団と“戦闘処女”の2コ師団で構成されており、誰の目から見ても弱兵力であった。当初、軍団長のミドルトン少

将の心には、この戦線に対する不安がないわけではなかったが、幽霊戦線はそれ以上に平穏だったため、やがてこの不安も緩和されてしまったようだった。しかし、仮にも1コ軍団の統率者である以上、幕僚たちに指示しておおまかな防衛計画を用意するぐらいの才覚は持ち合わせていた。

そんな状況の中で、心中ただならぬ思いのひとりの師団長がいた。第106歩兵師団長、アラン・ジョーンズ少将である。彼は、その戦線配置を前任の第2歩兵師団から引き継いでおり、右翼に歴戦の第28歩兵師団、左翼に第14機甲騎兵グループと肩を連ねる形で、“シュネーアイフェル（雪の高原の意）”と呼ばれる地区に自分の師団を展開させていた。

この地区の北には、幅約11kmほどのローズハイム峡谷が口を開けていた。うち、南側の8kmが同師団の担任で、第106歩兵師団の指揮系統に組み入れられた第14機甲騎兵グループが布陣していたが、ジョーンズ少将は同グループをも、単に第2歩兵師団の指揮系統から引き継いだにすぎなかった。

ローズハイム峡谷の残り3kmの部分は、第8軍団左翼に隣接するアメリカ第5軍団の戦区で、同軍団所属の第99歩兵師団の一部が布陣していた。指揮系統が異なる兵力の接点は、弱点と見るのが軍事の常識である。しかも



◀ドイツ軍の奇襲攻撃に対応するため前線へ向う
M4 シャーマン
▼迫撃砲で攻撃するサン・
ヴィット近郊のアメリカ兵

ローズハイム峡谷は1870年、1914年、1940年の3回にもわたって、ドイツ軍の攻勢回廊とされた歴史を持っている。この2つの理由が、ジョーンズ少将の不安を喚起していたのである。

しかし、第106歩兵師団はこの時点では連合軍の全戦線中でもっとも新参の部隊だったため、彼の説明は歴戦の先輩上級指揮官たちにとりあってもらえなかった。

だが、アルデンス地区がはらむ危険性を指摘したのはジョーンズ少将だけではなかった。第8軍団を統轄する第1軍司令官ホッジス中将の情報幕僚のひとり、ディクスン大佐がその人である。彼は歴史的な経緯ばかりでなく、あらゆる周辺状況を総合的に分析した結果として、近くドイツ軍による大攻勢が行なわれることを推察し、その指向方面は間違いなくアルデンス地区になると予想していたのである。

彼のそんな判断は、第1軍の上部指揮系統にあたる第12軍集団司令部にも上申されたが、ブラッドレー中将の情報幕僚には一笑にふされたにすぎなかった。「もちろん、ドイツ軍にその力があれば検討の余地は充分にある。でも、今のクラウツ共にそれだけの兵力が残っているわけじゃないか」というのがその理由である。こうしてディクスン大佐の意見具申は、結局、もの笑いの種にされて終わってしまった。

☆ドイツ軍大攻勢に出る！

そんな状況のなか、12月16日土曜日の早朝、正確には午前5時30分を少し回った頃、南はエヘテルナハから北はモンシャウに至る幽霊戦線の全域にわたって、かつてないドイツ軍の熾烈な砲撃が開始された。この砲撃がのんびりした幽霊戦線で七面鳥の特別レーションだけを楽



しみに、クリスマスまでの残りの日数を指折り数えて待っていたアメリカ軍将兵たちに与えたショックは、相当なものであった。

砲撃とそれに続くドイツ軍の大攻勢は連合軍の前線監視哨、前哨拠点、下級部隊本部といった軍隊の末梢神経細胞をつなぐ通信線をずたずたに切断した。このため、中枢神経に相当する上級司令部では、最前線で一体全体何が起こっているのかさっぱりわからぬ始末であった。「ドイツ軍反攻開始」の報がベルサイユの連合軍ヨーロッパ派遣軍総司令部に届いたのは、16日も午後遅くなっ

てからのことだった。この日、たまたま第12軍集団司令官ブラッドレー中将与アイゼンハワーは会議を持っていたが、二人は早速これを中断し、早速ドイツ軍の攻勢への対策の協議に入った。ブラッドレーは、ザールを狙うパットンの第3軍に対する戦術レベルの妨害攻撃だろうと考えた。だが、アイゼンハワーの考えは違っていた。彼は、ドイツは降伏前に必ず1度は大攻勢をかけてくるだろうと考えており、これがその大攻勢なのではないかと判断したのである。

今日、アイゼンハワーを「間違っただけで軍人になった政治家」と酷評する向きもあるようだが、ヨーロッパにおける彼の思考と判断は、政治的に非常に高いレベルにあるせいで戦術レベルからかけ離れていたとはいえ、常に順当なものであったことは否めない事実だろう。だからこそ、後年、アメリカ合衆国大統領の座に座ることができたのである。

しかし、ドイツ側の理由はどうあれ、先決は第8軍団に増援の手を差し伸べることである。そこで、とりあえずドイツ軍の攻勢面右翼で待機中の第10装甲師団“タイガー”と、左翼で同様の状態にあった第7装甲師団“ラッキークセブン”を急遽抽出して救援に向かわせることに決めた。

最高首脳部のこうした決定に先立つこと数時間前の午前9時頃、ミドルトン少将はバスターニユに構えた軍団司令部から次のような命令を発していた。「各部隊の撤退は現地点の維持が絶対困難となったときに限る」というものである。この命令は、麾下各級部隊の指揮官たちが相互に調整のうえ連携して防禦態勢を構築するのを困難にしまい、それが余計な損害につながるという弊害を生んでしまった。



アメリカ軍の203mm榴弾砲

ところが大局的に見ると、第8軍団麾下のまるっきりの戦闘処女か、その逆に休養・補給中の諸部隊の状況、時間さえ稼げば確実に増援が得られるという当時の連合軍側の台所事情、ノルマンディー上陸以来、大規模な撤退遅滞戦闘を1度も経験したことがないアメリカ軍将兵にそれがうまくできるのかという疑問、奇しくもドイツ軍側にとっては進出距離と時間が何よりも重要だったということから判断して、結局、この命令は正解だったといえよう。

ドイツ軍の怒濤のような大攻勢は、約130kmにわたる幽霊戦線の随所で展開された。これの矢面に立たされたのは、第8軍団の前哨部隊としてウィルツに師団司令部を構えていた第28歩兵師団の前衛、第110歩兵連隊をはじめとする諸部隊である。ちなみに、先の大砲撃の直後、ドイツ軍が戦線を越えて侵攻してきていることの第一報

「バルジの戦い」連合軍参加兵力

アメリカ第12軍集団

(オマー・N・ブラッドレー大将)

第1軍 (コートニー・ホッジス中将)

第5軍団

第7軍団

第8軍団

第3軍 (ジョージ・S・パットン中将)

第20軍団

第3軍団

第12軍団

第9軍 (ウィリアム・シンブソン中将)

第13軍団

第19軍団

※以下、各師団は日時により配属される上級部隊が転々とするので一覧とする

第2歩兵師団 第4歩兵師団 第5歩兵師団

第9歩兵師団 第26歩兵師団 第28歩兵師団

第30歩兵師団 第35歩兵師団 第75歩兵師団

第80歩兵師団

第87歩兵師団

第17空挺師団

第3装甲師団

第6装甲師団

第10装甲師団

その他、軍、軍直轄部隊多数

第83歩兵師団

第99歩兵師団

第101空挺師団

第4装甲師団

第7装甲師団

第11装甲師団

第84歩兵師団

第106歩兵師団

第2装甲師団

第5装甲師団

第9装甲師団

イギリス第30軍団

(ブライアン・ホロックス中将)

第43歩兵師団 “ウェイクシス”

第51歩兵師団 “ハイランダーズ”

第53歩兵師団 “ウェルシュ”

近衛装甲師団

第29装甲旅団

第33装甲旅団

第34装甲旅団

他、軍団直轄部隊



を伝えたのも、同連隊の前哨部隊のひとつだった。

そのとき、クレルボーに本部を置く第110歩兵連隊長フラー大佐の手元には、2コ大隊分8コ中隊があるにすぎなかった。麾下の第2大隊は、師団の予備兵力として師団司令部に召し上げられていたのである。そこでフラー大佐は第2大隊の緊急復帰要請を師団長のコート少将に伝え、少将は1コ中隊のみを師団司令部警護のために残すと、早速第2大隊を進出させた。

その頃、第110歩兵連隊の各中隊は、戦車を先頭に立てて攻撃してくるドイツ軍に対して、乏しい対戦車兵器をもって必死の防戦にあたっていた。イギリスで設計された6ポンド対戦車砲をアメリカで製造した57mm対戦車砲や、M10系駆逐戦車と同じ弾薬を使う3インチ(76.2mm)対戦車砲を中心とした阻止火点を構築し、それを歩兵が携帯する2.36インチバズーカ砲や、M1ガーランド小銃から発射する対戦車擲弾で掩護するのだ。ハーフトラックに50口径ブローニング重機関銃4連装銃座を搭載した対空自走砲M16も思わぬ戦果をあげた。たった1輦でドイツ軍1コ中隊を壊滅させたのである。

アメリカ軍の57mm対戦車砲



しかし、局地的な勝利なぞ大局に何ら影響を及ぼさない。重圧に耐えきれなくなった第110歩兵連隊の諸部隊は随所で拠点を放棄、次々に敗走するか捕虜になっていった。

☆アメリカ軍史上最大の降伏劇

翌17日、フラー大佐は第2大隊と増援の小規模な機甲兵力をもって、クレルボーの東に所在するマールナハの奪回をはかった。ここは16日にドイツ軍の手中に陥っていたからである。だが、奪回に向かった各部隊はいずれも強力なドイツ軍と遭遇、ことごとく阻止されたばかりか、逆にマールナハから進出してきたドイツ軍がクレルボーを脅かすに至った。

すでにこの段階で、第110歩兵連隊は10コ中隊が壊滅するか戦闘不能状態に陥っており、わずかに2コ中隊、つまりクレルボー防衛の1コ中隊と、ウィルツで師団司令部警護に任じている1コ中隊のみが実働戦力となってしまうていた。もちろん、増援の機甲戦力もいくばくかは到着したが、勢いを駆るドイツ軍の快進撃の前にはまったく歯がたたない。

そうこうするうちにも、クレルボーはドイツ軍の熾烈な攻撃に晒されて、その夜のうちに陥落してしまった。フラー大佐は部下を連れてとりあえず脱出には成功したが、その後36時間ほど周辺をさまよったあげくにドイツ軍の捕虜となってしまった。こうして第28歩兵師団第110歩兵連隊は壊滅したが、彼らがその血をもって得た時間は、連合軍にとってはこのうえもなく貴重なものとなった。

一方、ローズハイム峡谷の防衛にあたっていた部隊は、そのほとんどが16日中に殲滅されるか撤退していた。交通路上では撤退する諸部隊がそこそこでひしめき合い、明らかにパニックが広がりつつあった。この峡谷の扉が開いてしまうということは、ドイツ軍の機動兵力の侵入

ドイツ軍部隊を撃滅したM4シャーマン。連合軍部隊は、局地的な勝利をおさめたが、奔流のように押しよせて来るドイツ軍のために、緒戦では随所で拠点を失った



が容易になるということである。そのため、何としても守り抜かなくてはならない重要地区であるにもかかわらず、第14機甲騎兵グループはさほどの抵抗もせず、この撤退の列に加わってしまっていた。

その結果、戦線の両翼をドイツ軍に貫かれた第106歩兵師団の第422、第423両歩兵連隊は、シュネーアイフェル地区で孤立してしまった。その後、師団司令部にはとうとう最後まで連絡がつかぬまま、19日になって両連隊はドイツ軍の軍門に下った。

投降者数は8000とも9000ともいわれるが、これは、パターンに次いでアメリカ戦史上最大規模の降伏劇となってしまった。実戦経験のない戦闘処女ぶりといえはそれまでだが、ジョーンズ少将にしてみれば、第14機甲騎兵グループの撤退要請に合わせて両連隊をも引き下げれば、少なくとも2コ連隊全滅の憂き目に合わずともしなかっただけに悔しいところだろう。

また、その左翼側、ジェロウ少将のアメリカ第5軍団戦区では、第106歩兵師団に負けず劣らず未熟な第99歩兵師団と、それまでの戦闘によるダメージを癒やしていた歴戦の第2歩兵師団の戦線がズタズタに引き裂かれていた。しかし第5軍団は、ドイツ軍の大攻勢を正面から受け止めた第8軍団よりましであった。少なくともジェロウ少将は、断片的ながらも情報を入手して、部隊再建と戦線整理をおこなうことができたからである。

17日、この地区である戦争犯罪がおこなわれた。マルメディーを出た第285野砲観測大隊B中隊がそっくりそのままドイツ軍の捕虜となったのだが、彼らがドイツ軍の手によって無防備のままに射殺されたのである。その数は125名とも、86名ともいわれている。これは後に「マルメディーの虐殺」と呼ばれることになり、以降、同戦区ではその報復として、捕虜になったドイツ軍将兵

がその場でアメリカ軍の下級兵たちに射殺される事件が頻発した。

☆連合軍、反撃を開始！

ドイツ軍のこの大攻勢では、いずれも実質上さほどの戦果はあげなかったものの、連合軍戦線後方へのパラシュート部隊の降下、英語を話すドイツ軍将兵で編成された偽装特殊部隊の浸透という欺騙作戦も実施され、連合軍側の敗走はますます混乱の度を増した。また、送り狼よろしく、ドイツ軍戦車が連合軍の敗走部隊の列と踵を接して前進していることもあった。そのうえ、折からの悪天候が、連合軍得意の航空支援を不可能とした。それもそのはず、ドイツ軍側はあらかじめ気象状況を精査し、天候が悪くなる時期を狙って攻勢に出ていたのである。

しかし、攻勢開始後2日目を過ぎたあたりから、連合軍側の増援部隊動員が功を奏し始めてきた。そんななか、同年9月のマーケット・ガーデン作戦に参加、その後、損害の補充と休養にあたっていた第101空挺師団“スクリーミングイーグルズ”と第82空挺師団“オールアメリカン”の姿があった。

連合軍の航空機は、悪天候のため飛び立つことができなかった





師団長テラー少将が帰国、他の上級指揮官の多くも不在だった第101空挺師団では、やむを得ず砲兵指揮官のマッコーリフ准将が臨時に指揮をとることになり、C-47ならぬ“レッドボールエクスプレス”を大動員して陸路バスターニュへと向かった。もちろん、この段階でマッコーリフはじめ同師団の誰もが、後に「バスターニュを救った英雄」となることなど夢にも思っていなかった。

その間にも、守勢に立った連合軍の必死の防戦が続いていた。交通路に沿った拠点に陣取った少数のM4 シャーマンやM10、M36駆逐戦車は頑強に抵抗し、ときには、本来は間接砲撃が任務の105mm榴弾砲搭載のM7 自走砲が対戦車榴弾の水平射撃でドイツ軍戦車を迎え撃つシーンも見られた。しかしそんな抵抗も空しく、19～20日にかけて第28歩兵師団司令部があったウィルツが、翌21日にはサン・ヴィットも陥落した。

この頃になると、ドイツ軍の攻撃軸の方向は連合軍側にもある程度わかってきた。しかし、その目的となると所説入り乱れ、明確に解答できる連合軍幕僚は一人もいなかった。戦後になって押収された機密文書から、やっと当時のドイツ軍の作戦意図の全貌が判明したのである。

話はさかのぼって17日の午後、連合軍側きっての猛将パットン、アイゼンハワーを前にしていつもの大見栄を切っていた。「状況はわかった。我が第3軍は南から北上して、ドイツ野郎をぶった切るつもりだ」。つまり、連合軍の右翼から左翼に向けて進出し、西進したドイツ軍先鋒を遮断しつつ、バスターニュまで救援の契を打ち込もうというのだ。この発言はアイゼンハワーを大いに安心させた。パットンは、ザール地方への侵攻を狙う直率の第3軍の配置転換を嫌がるのではないかと予想されていたからだ。

「それで、配置転換には何日かかるのかね」。アイゼンハワーのこの質問に、パットンは「さしあたり3コ師団を振り向けるとして、作戦開始は22日の予定です」と答えた。しかし、すでにある方面を指向している1コ軍を90度方向転換させるのは、並大抵のことではない。それがわかっている列席者のなかには、またパットンが駄ボラを吹いていると思った者も多かった。だがアイゼンハワーはこの言葉を信じ、第8軍団をパットンの第3軍の指揮下に編入、彼の作戦展開がやりやすくなるようにはからった。

▼バスターニュを守りぬいたマッコーリフ准将▶バスターニュ西方で防禦につくアメリカ軍兵士



18日真夜中の第101空挺師団第501空挺連隊の到着を皮切りに、同空挺師団の諸隊は続々とバストーニュに到着していた。また、ロバーツ大佐率いる第10装甲師団B戦闘団も加勢に駆けつけてくれた。早速、ミドルトン少将はロバーツ大佐に、麾下部隊をいくつに分割できるかとたずねた。大佐は、自分の部隊がブツ切りにされてしまうのは嫌だったが、やむを得ず「3つ」と答えた。

兵力の集中運用は機甲戦の常識である。だが、これをあえて無視したミドルトンの戦術が、犠牲こそ大きかったがドイツ軍の進出を遅滞させるという点で正解だったことは、やがてバストーニュが守り抜かれた段階で証明されることになる。こうして、ミドルトンは第10装甲師団B戦闘団を3つに分け、それぞれに指揮官の名を冠してデゾブリー、チェリー、オハラと命名のうえ、バストーニュ前面の3つの村、すなわちノービル、ロングビリー、ワルダンへと派遣して、前衛阻止兵力としたのである。

また、155mmカノン“ロングトム”装備の第969砲兵大隊、第755装甲砲兵大隊、第10装甲師団B戦闘団の第420要地バストーニュの一地域。ドイツ軍の砲撃によって、建物がすでに破壊されているのがわかる

装甲砲兵大隊は、バストーニュの全周どこへでも防禦砲火を張ることができる位置に配置され、阻止砲撃に大活躍した。

☆バストーニュの救援

バストーニュ前衛拠点への何度かの攻撃に際して、第101空挺師団と第10装甲師団B戦闘団の各分遣隊から予想外に頑強な抵抗を受けたドイツ軍は、バストーニュを包囲したまま、ミューズ川を目指してさらなる前進を続けた。こうしてバストーニュは、ドイツ軍という名の巨大な流れの中に突き出た小さな岩のようになったのである。

22日の午前11時30分、マルビー西方の道路封鎖点で配置についていた第327グライダー歩兵連隊の将兵たちの前に、白旗を掲げた4人のドイツ軍使が忽然と現われた。彼らが持ってきた降伏勧告書は早速バストーニュに届けられ、マッコリーフ准将自らが目を通した。もちろん、彼にとって降伏は問題外である。

悩みに悩んだ末、マッコリーフはただ一言の回答を返



すことにした。ワーテルローでフランス軍のカンブロンヌ将軍がいった名言「クソくらえ！」をもじって、「ナッツ！（バカたれ！）」と書いたのである。これにはドイツ軍使も驚いた。「これは拒否なのですか、それとも受諾なのですか？」と。

その頃、第3軍の先鋒を務めるギャフィー少将の第4装甲師団「ブレイクスルー」は、勇躍前進を開始していた。だがいくら進まないうちに、激しい交通路の破壊とドイツ軍の頑強な抵抗に遭遇し、進む毎に進撃は難渋の度を強めていった。また損害も大きく、途中で先鋒部隊の交代が何度か行なわれた。

しかし23日になると、西に張り出してきたロシア高気圧のおかげで戦域全体にわたって航空支援が可能となり、包囲されたバストーニュ守備隊にはC-47による各種需品の空投補給がおこなわれ、戦線各地では、P-38ライトニングやP-47サンダーボルトといった戦術戦闘機群による大々的な航空支援も展開された。

しかし12月25日のクリスマス当日の未明、ドイツ軍は総力を結集してバストーニュを攻略し、外周陣地の一部に侵入した。ところが、頑強な反撃に遭遇すると共に増

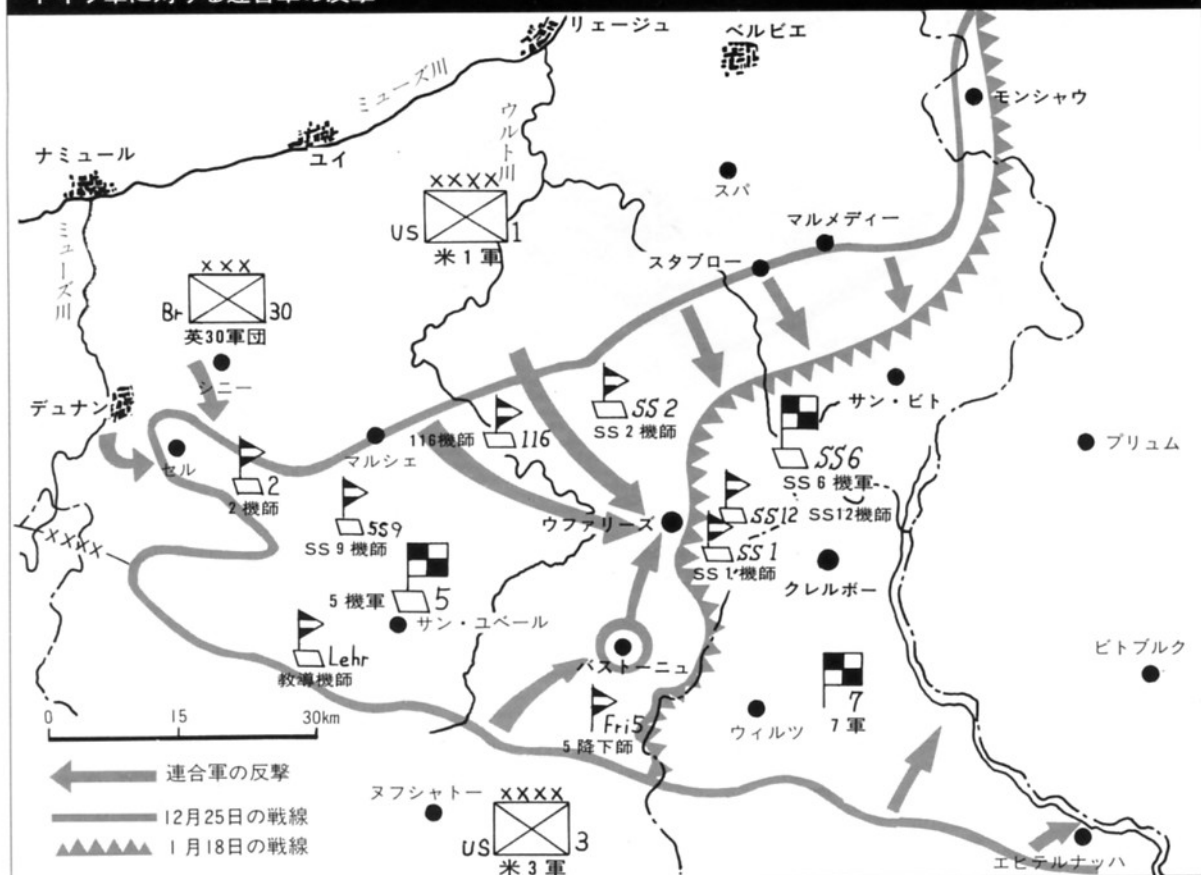
援が続かず、あと一押しができずにいた。翌26日は、ドイツ軍がバストーニュの町の広場から1.6km以内にまで迫った状況から始まった。この日も天候がよく、連合軍機は輸送に航空支援にと大活躍し、バストーニュ守備隊の士気は大いに上がった。と同時に、救援の第4装甲師団の到着はまだかという焦りも見えはじめた。

一方、第4装甲師団は航空支援を受けながら、大損害にもめげず着実に前進していた。A、B、Rの3つの戦闘団のうち、もっとも小規模なR戦闘団を指揮するエイブラムズ中佐は、固い決意を秘めて愛車のM4 シャーマン「サンダーボルトⅣ」車上の人となっていた。「今日こそバストーニュ守備隊と連絡をつけてやろう」と。

今日、M1戦車にその名を残す若き日のエイブラムズ中佐は、第94装甲砲兵大隊の支援射撃の下、直率の第37戦車大隊を中心としたR戦闘団をしゃにむに突き進めた。先頭はM4 シャーマン系の重装甲型であるM4 A3 E2「ジャンボ」を務める。

26日午後4時55分、第101空挺師団第326空挺工兵大隊の一部が守る道路封鎖点に戦車の音が近づいてきた。同大隊のウェブスター中尉は、それが友軍のM4であるこ

ドイツ軍に対する連合軍の反撃





▲撃破されたパンター戦車の横を通りすぎるM36駆逐戦車▶航空攻撃によって破壊されたドイツ軍車輛を調べるアメリカ兵

とに気づく。中尉は走り寄ると、コマンダー・ハッチから身を乗り出したボグゲス中尉と握手した。こうしてついに、第3軍とバストーニュ守備隊との連絡が果たされたのである。

さて、バストーニュの救援は成ったが、ドイツ軍の攻勢がそれで終わったわけではなかった。糧食、弾薬、燃料の欠乏に喘いでいたドイツ軍部隊は随所で投降してきたものの、まだ充分に戦力を残しており、最後の力をふりしぼってバストーニュ攻略をはかったのである。だがもちろん攻略はならず、逆に次々と押し寄せる連合軍側の増援に圧迫され続け、ますます疲弊の度を強めていった。そして1945年の1月を迎える頃には、ドイツ軍の大攻勢はまったく見込みのないものになっており、それから数日後には、撤退命令が下令されたのだった。

この戦いを通して、連合軍側はいくつかの事実を再認識した。まずひとつは、アメリカ軍将兵が意外なほどの粘り強さを示したということである。1943年、カセリーヌ峠でドイツ軍にこてんぱんにやられて尻尾を巻いて逃げ出した同じアメリカ兵が、1944年のアルデンヌでは、塹壕足や凍傷、各種需品の不足に苦しみながらも一歩も引かなかったことは、アメリカ軍自身にとっても大きな自信へとつながった。

もうひとつは、今までにも増しての航空兵力の重要性である。1944年12月16日のあの日、もし連合軍側の航空支援が思う存分実施できたら、ドイツ軍は急速に消耗し、ろくに前進もできなかったはずだからである。



後年、「バルジの戦い」として知られるドイツ軍のこの大攻勢は、連合軍側にきわめて大きな損害をもたらした。連合軍側の戦死・行方不明合計約30,000、負傷者約47,000という数字が、何よりもその事実を物語っている。と同時に、逆説的には多くの将兵の命を救った戦いだったともいわれている。もしヒトラーがこの攻勢を実施しなければ、その兵力はすべてジークフリート線の向こう側、ドイツ国内に温存されることになり、連合軍のドイツ占領には、さらなる流血と時間が必要だったのではないかという見方である。

筆者は、いつも歴史に「もし」はないと書いているが、「もし」そうなった場合、確かに第3帝国の崩壊が先延べになったことは間違いない。多くの歴史家がいうように、「これでよかった」のである。